
セカンド

asaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカンド

【Nコード】

N9601U

【作者名】

asaki

【あらすじ】

同級生の英人にひそかな恋心を抱く美鈴。
ある日、見かけた英人の後追って廃ビルへ。
そこで見たものは・・・。

はじまり1

「あ、美鈴、おはよう。」

英人が笑顔で手を上げる。

「おはよう。秀治。珍しいね朝からくるなんて。」
私は応える。

私達は専門学校の同窓生。

「うん、今日は早く起きたから」

靴を上履きに履き替える。

「来週からテストだもんね。」

私は英人が履き替えるのを待ちながら話す。

「え、そうなの？」

英人知らなかったんだ。学校あんまり来てないもんね。

「うん。今週どの授業も範囲とか言うと思うよ。」

「ええ、まじで、バイトいれちゃったよー。」

玄関に数人が入ってくる。

「あ、若松くんおはよ。美鈴も。」

私も英人もみんなに挨拶を返す。

英人はクラスでも人気の男子。人当たりがよくって、少し大人っぽくて、彼を狙ってる女子は多い。彼女はいないみたいだけど。周りにたくさんの女の子がいる。単に特定の相手がいないだけかも。

「若松くんと美鈴一緒にきたの？」

多花子が言う。

「ううん、ここで一緒になっただけ。」

「そうなんだ。」

ほらね、すぐにチェックが入る。

「あ、俺教務に寄らないと、美鈴、先行ってて。」
英人が言う。

「うん。」

私は他の女子と一緒に教室へ上がる。

「美鈴と若松くんって仲いいよね。」

「そんなことないよ。」

「ええー、でもよく話してる感じる。」

「携帯知ったのとか、先週だよ。」

「ええっ、そうなの？」

「うん、他の子みんな知ってるでしょ？」

「まあ、そうかな。」

「私にだけ教えてくれないのかと思って、先週言ったら、あれそうだった？だって。その程度。」

私は笑う。

「まあ、あの子はモテるだろうからね。」

「そうだね。」

そう、私も英人が私にはちょっと接し方が違うかも、って思わないこともない。クラスの女子で私のことだけ名前で呼んでくれてる。それは、入学したてのころ席が隣だったから、名前で自己紹介したからそ、それだけのこと。メールだって、こっちからメールしなきゃあっちからは連絡はない。その程度の仲。

昼休み、英人が私の隣の席に座った。

「どうしたの？」

「飯、食いにいこう。」

「ええ、そんなに時間ないよ。午後の実習の準備もしなきゃ。」

「大丈夫だって・・・じゃあコンビニ付き合ってよ。」

「コンビニならいいけど。」

「じゃあ、行こう。」

私は英人に着いて、コンビニに向かった。

どうしたんだろう。私を誘うなんて・・・珍しい。男子一杯いたのに。

普通にコンビニに行って、戻って一緒にお昼を食べた。

私と英人は調理の専門学校に通ってる。

実習を終えて帰る。

ああ、疲れた。今日は和食の実習だった。

和食の先生、恐いんだもん。

「美鈴、お疲れっ。」

駅へ向かう道、私を追い越して走っていく。

「あ、お疲れ」

後ろ姿を見送る。

信号無視してる。急いでるんだ。

次の日英人は来なかった。テスト前だって言ったのに・・・。
連絡してみようかな。

でもきつと誰かがしてるよね。

午後の実習の休憩時間、私はコンタクトが痛くて、教室に戻った。
誰もいない教室。

っと思ったら、誰か、座ってる。

英人？

机に伏してる。

寝てるの？

「英人？来たんなら、実習出なよ。」

英人が顔を上げる。

あ。

え・・・。

泣いて、る？

「ひ、でと・・・？どうしたの？」

私は慌てた。

「なんでも、ねえ。」

「え、でも。」

「大丈夫。」

英人はそう言って涙を拭う。

「美鈴……。」

英人が私の腕を引っ張る。

座ったまま、私の腰に抱きつく。

「英人……。」

「あったけ……。」

英人はそう言って目を閉じた。

どうしよう……。でも、振りほどけない。

私はそっと英人の頭を撫でる。

なにか辛いことがあったのかな。

しばらくそうしてた。

「美鈴、実習いいの？」

「あ……。忘れてた、戻らないとっ。」

「俺を置いてくの？」

「えっ。」

「冗談だよ。俺も、行くよ。まだ入れて貰えるかな。」

「たぶんね、怒られると思うけど。」

「うん。」

それから、英人はまた学校に来たり、来なかったり。

さすがにテストは来てたけど、テストだけ受けるとすぐに帰っていいく。

私にも挨拶程度。

ちょっと期待したのにな・・・。

テストも終わって、今日は早く学校が終わった。

私はバイトの時間まで街をぶらついていた。

通りの角に、見覚えのある姿。

あれ、英人？

なんか慌ててるっぽい、っと思ってるうちに走り出した。
どうしたんだろう。

確か、今日も来てなかった。

ここまで来てるんなら、学校来いよ。

私は暇にまかせて、追いかけた。

英人は通りを抜けて、廃ビルの中へ入っていった。

こんなところに、なにが。

ピカッと何かが光った。

え。

何。

英人、大丈夫なの・・・。

私は恐る恐る、中へ入る。

薄暗い廃ビルの中、何かが奥の部屋で光ってる。

自分の心臓の音が聞こえそう。

ゆっくりと近づいて、壁に隠れてそっと何かが光った部屋を覗く。

英人だ。

え。

英人の向かいには、何か・・・いる。

なに、あれ・・・。

あんな大きな動物、像？

いや、ウロコが着いてる。

ワニ？

私はいろいろ考えたけど、あんなもの見たことない。

部屋はかなり広くて、その変な生き物と英人の間にはだいぶ距離がある。

英人が銃のようなものを構えて、撃つ。

それがピカッと眩い光を放つ。

「くそっ、外したっ。」

英人はそう言うと同時に、その変な動物が口から火を噴いた。

ええっ。ドラゴン？

単純にそう思った。火を吹くって言ったらドラゴンだよ。

英人はそれを横っ跳びに飛んで交わす。

「へったくそー。」

何？

誰？

吹き抜けになった二階の窓に、誰かいる。

なんで、あんなところに人が・・・。

外の光が逆光になって顔は見えない。

その人は、そこから飛び降りた。

飛び降りると同時に、手に持った銃を放つ。

さっきと同じような光がとほとばしる。

一瞬、目がくらむ。私は反射的に目を閉じた。

目を開けると、部屋には二人が立っている。
あの動物はもういない。

「また、横取りか。」
英人が言う。

「おまえがトロいんだよ。逃げられたらもったいねえだろ。」
もう一人は、私のところからは後姿だけど、あれは……。

「邪魔ばっかしてんじゃねえよ、東吾。」

やっぱり、東吾くん。同じクラスの東吾くんだ。

なんで、東吾くんが……。

二人って、仲がよかったっけ。

っていうか、なんだったの、あれ。

私が混乱しているうちに、いつの間にか二人の姿は消えていた。

はじまり2

次の日学校へ行くと、東吾くんがいる。

あたりまえ。東吾くんは学生なんだから・・・、でも昨日のあれは。英人は来てない。

あれ東吾くんだったよね。

東吾って呼ばれてたし。

英人だったし。

私はいつの間にか東吾くんを見詰めてしまっていた。

不意に東吾くんが私を見る。

あ・・・。

私は咄嗟に目を逸らす。

なんだったんだろう。

現実だよね。

学校にいる東吾くんを見る限りおかしいところはない。

午後になって英人が来た。

「また遅刻？」

「んー？俺は忙しいの。」

「そんなこと言ったらみんなそうだって、出席やばいんじゃないの？」

「うっせえなあ、かあちゃんかおまえは。」

そう言いながら私の隣に座って、机に伏してしまう。
せつかく来たのに、寝るのね。

机に伏せて目を閉じている英人を見る。
別に変わったところはない。
いつもの英人だ。

そういえば、英人この前泣いてたんだっけ。
なんだったんだろう。
あの時、私英人に抱き寄せられたんだっけ。
泣いてる英人の頭を撫でた髪感触を思い出す。

ドキドキするとかそんなの通りこしてたな・・・。
泣いてる子供をあやす様な、そんな感じだった。

無邪気なやつ。

私は自分が再試験に引っかけた実技の試験に英人も引っかけたことを思い出した。
放課後に先生に補講をお願いしていたので、英人も半ば無理やり連れて行った。

二人で並んで、練習をしていると東吾くんが実習室の外を通り掛った。

実習室はガラス張りになっていて、廊下が見える作りになっている。

私は一瞬、昨日のことが頭を過る。

英人をちらっと見たけれど、アジを裁くのに必死で気が付いていない。

東吾くんは実習室に入って来て、私達の前に立つ。

「何、補講？」

東吾くんが言う。

英人は何も答えない。ちらっと東吾くんを見ただけ。
シカト？

「うん、この前の試験引っかかっちゃって。」
しかたなく私が答える。

「おまえはなにさせてもヘタクソだな。」
東吾くんが英人に言う。

英人は完全に無視。

「美鈴ちゃん、こんな奴といって面白いの？」
「えっ、えっと。」

返答に困って英人を見るけれど、澄ましたまま何も答えない。

「じゃあ、がんばって。英人は落ちるだろうけど、美鈴ちゃんは受かりますように。」
東吾くんはちよっと馬鹿にしたように、そう言い捨てて帰って行った。

二人って、仲悪いんだ……。知らなかった。

東吾くんが見えなくなったので、英人に声を掛ける。

「英人？」

「ん？」

怒ってはいないみたい。

「東吾くんとなんかあったの？」

「え？」

「喧嘩したとか？」

「ああ、あいつとはあんなもんだよ。」

「そうなの？」

「ああ、相手にするだけ時間の無駄。自分がちよつと器用だからって、人を馬鹿にしやがって。」

そういえば実技の試験、どの科目も東吾くんは得点上位者に名を連ねていた。

なんとか二人とも再試験は大丈夫そうなところまで仕上がった。

「美鈴、今日ありがとな。」

「ん？」

「練習誘ってくれて。」

「ああ、うん。英人はほつとくとやんないから。」

「はは。そうだな。さすが、よくわかってんな。」

「英人、いつも忙しそうだね。」

「ん。うん、いろいろやることがあつて。」

「そうなんだ。」

もう少し詳しく話してくれたいのに。
泣いてた理由とか・・・。
訊きたいけど、訊けない。

それから英人は学校に来るとたいてい私の傍にいた。
だからといって仲が深まるわけでもなかったけれど、英人が傍に
いることが自然になった。

「美鈴と若松くんって付き合ってたの？」

「えっ？ううん。全然っ。」

まあ、そういう噂が立つかもってことはなんとなく予想してたけど・
。。。

「でも、いつも一緒にいるよね。」

「ああ、うん、なんか懐かれちゃったみたいで。はは。英人ってち
よっと子犬っぽくてさ。」

私はなぜか妙に焦ってしまう。

「子犬？」

「最初に面倒みたら、その人を親と思うみたいな。あはは。」

「それは、ひよこだろーが、俺はひよこかよ。」

頭の上で英人の声がした。

・・・最悪だ。

聞いてたのかな・・・。

「あ、英人。・・・学校来たんだ。」

「いっつもちゃんと来いってうるせーのは誰だよ。」

英人は、ガタンっと、私の隣の椅子に座る。

先生が来て、みんなが席に戻っていく。

「それに、今日再試だろ。この前せっかく練習したんだから、一緒に合格しないとな。」

澄ました顔で言う。

あ・・・なんかそれ、うれしい。

私は“一緒に”というフレーズがうれしくて、なんて応えていいかわからなくて黙ってしまった。

英人は相変わらず授業中は寝てる。

寝てる英人を眺めていて、何気なく視線を上げると東吾くんが目があった。

東吾くんは慌てるでもなく、そのままゆっくりと目を逸らした。

なんだろう。

たまたまかな。

再試験は二人とも無事合格。

「「やったー。」」

二人で喜んで、ハイタッチ。

「美鈴、お祝いしようっ。」

英人はやたら喜んでる。

「お祝い？」

「おう、俺がマック奢ってやる。」

「お祝いがマックうー？」

「文句言うなよ。」

「うそうそ、奢ってもらえるならなんでもいいよ。」

「よしっ、行こう。」

マックは学校から少し離れたところにあるので20分くらい歩かなきゃならないけど、英人と一緒だとその距離もうれしい。もつと遠くてもいいのに。

二人でマック目指して歩いていると、英人が急に立ち止まった。

「英人？どうしたの。」

「美鈴、悪い。俺、用事思い出した・・・。」
顔が真剣。

「え？」

「ごめん。お祝いは今度な。俺、行くわ。」

英人はそう言うと、来た道を走って戻っていく。

「英人っ。ちょっと。」

私は一人取り残されて、立ちつくして走っていく英人を呆然と眺め

ていた。

なんなのよ・・・。

まさか、また・・・。

英人は既に道の向かいへ渡っている。

信号が点滅してる。

三番街と書かれた通りへ入っていくのが見えた。

私は走り出していた。

横断歩道を走る。

渡りきるまえに信号は赤になったけれど、なんとかセーフ。

英人の行った方へ走る。

英人がアーケードを抜けたところを右へ入っていくのが見えた。

アーケードは短くはないのに、こんな短時間であんなところまで・・・。

男の子の足って。

私は体力差を痛感しながら走る。

今日ヒールじゃなくて良かった。

やっとアーケードを抜ける。

右へ曲がる。

英人の姿はない。

前に英人がいたのは、廃ビルだった。

きつとまたひと気のない場所。

私は人通りの少ない通りを探しながら走る。

もう使われていない店舗が立ち並んでいるけれど、英人の姿はない。

どこ行っただろう。

結局英人は見つけれないまま、家に帰った。

あーあ、一緒にマックでお祝いしたかったな。

女の子を放っていくなんて、こういう神経してんのよ。

女の子として見てくれてるのかな。

なんだか不安になる。

それから二、三日英人は学校に来ていない。

東吾くんはいつも通り来てる。

メール、してみようかな。

メアドは聞いたものの、結局ちっとも活用できていない。

学校から駅までの帰り道。

前の方に東吾くんがいることに気が付いた。

東吾くんは、横断歩道で立ち止まってる。

信号、青なのに・・・。

よく見ると、空を見上げてる。

走り出した。

英人と同じ動作。

私は追いかける。

あれ以来、毎朝玄関で迷うけれど、結局スニーカーを履いてきてる。実を言うと、私は高校までスプリンターだった。

タイムははつきりいつて全然だったけれど、走り慣れてはいる。それでも、やっぱり男の子の足には敵わない。

東吾くんの行った方は・・・確か、廃ビルがあった。

入学当初、心霊スポットだとか言って話題になったた。

あそこなら・・・私は店舗の敷地を抜けてショートカットする。敷地を仕切っているガードレールを飛び越える。

ビンゴっ。

東吾くんが前の道を横切っていくのが見えた。

東吾くんの走っていた道へ出る。

東吾くんが角を曲がるのが見える。

私も同じ角を曲がる。

え・・・。

いない。

私は辺りを見回す。

確かに・・・ここを曲がったのに。

私の前には一本道が続いていて、突き当りが廃ビル。

距離は、200m。

一瞬じゃあそこまではいけない。

周りの建物は閉まっている。

入っていけそうな道もない。

わたしはしばらくそこに立ちつくしていた。
狐に摘ままれるってこういう感じなのかな。

私は東吾くんが消えた違和感を抱いたまま、とぼとぼと廃ビルに向かって歩き出した。

なんともいえない不思議な感じがした。

不安と違和感が入り混じる。

行くべきじゃないのかも。

こころの片隅で警報が鳴ってる気がする。

私は足を踏み入れてはいけない境界線を越えようとしているのかもしれない。

それが余計に私の好奇心を刺激する。

好奇心と英人への想いが私を惹きつける。

英人がいるかもしれない。

英人と何かを共有できるかもしれない。

私は廃ビルの入り口で立ち止まる。

誰かが私を呼びとめた気がして振り返る。

誰もいない。

来た道がやけに長く見える。

引き返すなら今……。

一度足を踏み入れたらもう戻れない。

一瞬何かが光った気がした。

ほんの一瞬の僅かな光。

あの光は・・・。

私は廃ビルに足を踏み入れた。

知らない風景1

光に引き寄せられて、侵入を拒むチェーンを超え、ビルの敷地に入る。

ドアは堅く閉ざされているかに見える。

ノブに手を掛けて回す。

ガッチャン。

ノブを回した感触に重い手応え。

鍵が、開いた・・・？

まさかと思ってドアを押す。

ドアは開いた。

どうして？

ドアの隙間からビル中を覗くと、薄暗い。

また何かが光った。

やっぱり、中に誰かいる。

英人。

東吾くんを追いかけて来たはずなのに、いつの間にか私の探し人は英人にすり替わっていた。

息を殺して、ゆっくりと中に入る。

後ろでガシャンっとドアが閉まる。

光が見えたってことはこの階にいる？

すぐ近くにドアがある。

ドアに近づいて耳を澄ます。
物音はしない。

この前英人が対峙していた怪物のことを思い出す。
もしあんなのが出てきたら、どうしよう。
急に不安に襲われて、足を止める。

けれど、戻るという選択肢は私の中に思い浮かばなかった。
恐れながらも、恐いもの見たさと言うのか好奇心に突き動かされる
ように再び足を進める。

奥にもう一つドアが見える。
あっちへ行ってみよう。
そのドアの前に立った時。また光った。

ここからじゃない。
私は光のした方を見る。

廊下の奥だ。曲がり角になって先は見えない。
物音はしない。
ゆっくりと進み、曲がり角の壁に背を付けてまるで探偵にでもなっ
たように振り返るように肩越しに廊下の先を覗く。

階段だ・・・。
脇にエレベーターもある。
ふうっと殺していた息を吐く。

薄暗い廃ビルの中の階段。

何とも言えない雰囲気をかもし出してる。
意を決して階段を上る。

階段を上ると、目の前のフロアにいた。

大きな怪物。

それから・・・英人。

やっぱり、いた。

ところどころにはめ込まれたフロアの仕切り板の間からその姿が見える。

一瞬その光景に圧倒されていたけれど、我に返って仕切り板の影に身をひそめる。

で？どうするのよ。

自問する。

ただ英人に会いたくて、来てしまったけれど。

そういえばと、東吾くんのことを思い出す。

彼の姿はない。

さっきまで音なんてしなかったのに、あの生き物の息遣いと唸り声がすごい臨場感をもって伝わって来る。

どうしよう。

また閃光が走る。

ここまで来たものの、出て行けない。

英人が動いているであろう足音とあの生き物の動く音と振動が伝わる。

なかなか決着は付かないようだ。

私は物陰にしゃがみ込んで時々英人の様子を窺っていた。

どれくらいそうしていただろう。

かなり時間が経ったはず。

「ここで、何をしてるの？」

不意にすぐ近くで男の人の声がした。

はっとして見上げると目の前に男の人が立っていた。

いつの間に。

グレーのお洒落なスーツ着た長身、長髪・・・モデルさんみたいな人。

私を面白そうに見下ろしている。けれど、普通じゃない。

なんともいえない威圧感で私は声が出なかった。

こわい。

その人は身を屈めて私の腕を掴み、立たせようと引っ張る。

ひっぱられるまま立ち上がる。

目が、逸らせない。

だれか・・・。

乱暴な仕草ではなく、むしろ立ち上がる助けをしてくれるような仕草なのに、私は恐くて声が出ない。

「これはおまえの連れか？」

いきなりその男の人が大きな声を張り上げ、私の腕を強く引っ張って、英人のいる方を向かせる。

どうしよう。

英人がこっちを見てる。

驚いた顔。

何か言ってるようだけど、わからない。

「いい土産が出来た。お嬢さん、一緒に来てもらおうよ。」
男に人が言う。

え・・・。

「美鈴っ。」

英人の叫ぶ声。

私の意識はそこで途切れた。

目を覚ますとベットのの上にいた。

どこ？ここ・・・。

起き上がって部屋を見回す。

知らない部屋。

あ・・・。

“一緒に来てもらいますよ”と囁いた男の声が甦ってくる。

わたし、誘拐された・・・。

すぐにベットを降りて、ドアへ向かう。

鍵が・・・掛ってる。

どうしよう。

どうしよう。

帰らないと。

家族の顔が浮かぶ。

そうだ、携帯。

ポケットを探る。

あった。

携帯を開く。

そうだ、英人。

英人に掛ける。

すぐに切れた。

圏外。

なんで・・・。

ベットの脇に私の鞆がある。

もう一度、ドアを開けようと試みる。

ガチャガチャと鍵の掛った音が響く。

焦る。

どうしよう。

どうしよう。

わたし・・・殺される。

そう思ったとたん、涙があふれて来た。
ぼろぼろ大粒の涙がこぼれる。

やだ。やだ。

こんなの、やだ。

誰か、誰か助けて。

ドアと叩く。

開けて、ここから出してっ。

心の中で叫びながら、ドアを叩く。

涙と不安で言葉が出ない。

どんなにドアを叩いても誰も答えない。

わたしははるはるとその場に座り込んだ。

涙が次から次へと溢れて来る。

あの時、行っちゃだめだって心の中で警報が鳴ってたのに・・・。
入っちゃいけない気がしてたのに、どうして・・・わたし。

後悔が私を覆う。

ずっと泣いていた。

何度も携帯の電波を確認して、外に出られるところがないか探して
歩き回った。

ベットとテーブルと椅子だけの部屋。

窓もない。

やがて疲れて、座り込み。

そのままその場に体を横たえた。

誰か、助けて。

あの時、英人は私の名前を呼んだ。

英人・・・。

英人がなんとかしてくれる。

英人に近づきたいあまり無茶なことをした。

ばかだ、私。

大人しく学校で会えるのを待っていればよかったのに。
携帯に連絡すればよかったのに。

簡単なことだったのに、それをする勇気がなくて・・・廃ビルなんかに。

自分の馬鹿さにまた涙が溢れて来る。

英人。

助けて。

心の中で呟いて。

口に出して呟く。

なんどもそれを繰り返す。

うわ言のように、繰り返す。

私はやがてそれにも疲れて、ぼーっと床を眺めていた、

カチツと鍵の開く音。

放心状態だった私は、その音に気がつくのに少し時間が掛った。
ドアが開く音。

私を見下ろすあの男。

私の腕を掴んだ男だ。

「なぜ、そんなところで寝ている？」

あ・・・恐い。

言葉が出ない。

「生きてはいるようだな。」

男はそのまま部屋を出て行った。

また鍵の閉まる音。

私、どうなるんだろう。

体を起こす。

少し冷静さが戻ってきた。

ふと見ると、テーブルの上に何か置いてある。
立ち上がって見に行く、水とパン。

まだ、殺されはしないみたい。

そういえば、喉が渴いている。

いっぱい泣いたからかな・・・。

まさか、毒とか入ってないよね。

水の入ったコップを持って、匂いを嗅ぐ。
なんの匂いもしない。

少しだけ舐めてみる。味も大丈夫っぽい。

ふと自分の鞆にペットボトルを持っていたことを思い出す。
コップを置いて、鞆を開ける。

あった。

ペットボトルのお茶を飲む。

まだ半分以上残ってるけど、二口だけ飲んで蓋を閉める。
後に残しておこう。

ベットに倒れ込む。

ここでじっとしているしかないのかな。

携帯を開く。

やっぱり圏外だ。

カチカチとドアの方で音がする。

また、誰かきた・・・？

私はベットから降りて、ドアの方を窺う。

カチッ。

ドアが開く。

ゆっくりとドアが開く。
入ってきたのは、英人。

「・・・英人。」

「美鈴・・・よかった・・・無事か？」

泣きそうになる。

「逃げるから」

英人はそう言って私の鞆を持つと、私の腕を取った。

「英人？」

「大丈夫、俺がついてる。」

真剣な顔。

英人に腕を引かれて、部屋を出る。

私がいたのは小さな建物で、すぐに外に出ることができた。
建物の外は、森。

英人は私の腕を引いて建物の裏へまわって、小さな小道へ入る。

「美鈴、歩けるか？もう少し行ったら車があるから。」

私は頷く。

少し行くと、小道をぬけたところに車が見えた。

とたんに気が抜けそうになる。

私たちが車に近づこうとしたとき、車の陰から、あの男が現れた。

「相変わらずだな、おまえ。」

男は英人を見る。

「どいてくれ、こいつは関係ない。」

英人が言う。

「ああ、別に最初からおまえを呼ぶための道具だよ。おまえがちつとも俺の話を聞こうとしないから。おまえが大人しくうちへくれば、彼女は家へ帰してやる。」

「前にも言った筈だ、俺はどっかへ移る気はないんだ。」

「そんなところにいても腕は上がらんぞ。うちならもっとおまえを鍛えてやれる。せつかくの素質がもったいない。」

「それは、俺の努力がたりないだけだ。」

「聞きわけがないな。仕方ないな。手荒なことはしたくないんだけど。」

男が一步前出る。

英人は私を自分の背に隠す。

「矢口。おまえしつこいんだよっ。」

どこからか声がした。

空から何かが降って来て、目の前の男に飛びかかった。

「東吾……。」

英人が呟く。

男に掴みかかっているのは、東吾くん。

「早く車に乗れっ」

東吾くんが叫ぶ。

英人は私を後部座席に乗せてエンジンを掛ける。

発進と同時に、東吾くんが助手席に飛び乗ってきた。

森の中の舗装のされていない道をかなりのスピードで走りぬける。
私はシートベルトを締めて、手擦りにしがみ付いていた。

「追ってはこないみたいだな。」

東吾くんがバックミラーを窺って言う。

「ああ。で、なんでおまえが？」

英人が言う。

「当然だろうが。それより、なんで彼女が？」

東吾くんに口調がきつくなる。

「おまえには関係ない。」

英人はいつもの調子。

「そうはいかない。部外者を巻き込むなんてどういふつもりだ。」

「わかってる。」

「ばかかおまえは。彼女に託したんだろう？」

「なんのことだ。」

「隠したってわかる。じゃあなんで、彼女がここだと分かった？」

「人のこと言えるのかよっ。おまえだってやっただろ。」

英人が吐き捨てるように言う。

「おまえと彼女は違う。彼女を危険な目に合わせて。」

東吾くんが怒鳴る。

「わかってるよ。だから、美鈴は俺が守る。」

英人が言う。

ドキッとした。

そんなこと、言ってくれるんだ。

東吾くんはそれ以上なにも言わなかった。

車はいつの間にか舗装された道路に出ていた。

会話のないまま、車はトンネルに入った。

ところどころに付いている外灯がときどき車内を照らす。

他に車はいない。

対向車もない。

随分長いトンネル。

曲がっているのか、出口が見えない。

「おい、英人。」

「あ？」

「これ・・・街いきか？」

「え？」

東吾くんが、カーナビのパネルを操作する。

「ばか、これ城行きだ。どうも長いと思ったんだ。」

東吾くんがはあっとため息を吐く。

「そうだ、設定し直すの忘れてた。」

「なんでおまえはそう抜けてんだかな・・・。」

「おまえが横でぎゃあぎゃあ言うからだ。」

「人の所為かつ。美鈴ちゃん城に連れてってどうすんだよ・・・。」

「・・・まあ、なんとか・・・してくれ。」

英人が東吾くんを見る。

「ったく。」

二人はまた話さなくなった。

しろ？城？

私はどうしていいかわらなくて、ただ成り行きを見守っていた。

それからまだ随分トンネルを走って、やっと前方に出口らしい光が見えてきた。

トンネルを抜けたところは、見渡す限り野山の広がる美しい場所だ

った。

どこなんだろう。

わたしは思わず“きれーっ”と呟いた。

「だろ？ いいとこなんだ。時間があつたら案内してあげるよ。」
東吾くんが言う。

「ほんと？」

「そんなこと言ってる場合かよ……。」
英人が言う。

「怒られんのはおまえだけだからさ。説教されてる間、俺と彼女は散歩してくるよ。」
東吾くんが言う。

「まじかよ……、てかさ、おまえだけ下して俺は美鈴連れてUターンすればいいんじゃない？」
英人は辛そうな顔をする。

「そんなことしたら足がつくだろう。ばか。もう諦めろ。自業自得だ。」

東吾くんが呆れて言う。

やがて、ポツポツと民家らしい建物が見え始めた。

でも、なんだか違和感のある建物。

どこなんだろう。

木造の日本家屋は一つも見当たらない。こんな田舎なのに。

やがて何もない原っぱの真ん中に、そびえるようなゲートが現れた。東吾くんが窓から腕を出す。

センサーのような光が、東吾くんが腕にはめているブレスレットに反応してきらきら光っている。

ピコピコとカーナビから警戒音が鳴る。

なんだろうと私は、前を覗く。

「やっぱ見つかったな。」

東吾くんが英人の方をみる。

「セキュリティに問題がないってことが証明された。」
英人がそれに答える。

“おかえりなさいませ。東吾様と若松様は確認いたしました。もうおひとかたご確認ができません。”
カーナビから声がする。

「俺の連れだから、とりあえず通してくれ。」
東吾くんがカーナビのスイッチを押しながら、言う。

“かしこまりました。”
ゲートが開く。

へえ、無線かな……。すごい。

ゲートが開くと、そこには沢山の建物立ち並んでいた。街だ。

なんで？さっきは、見えなかったのに・・・。
私は後ろを振り返る。

ゲートは閉じてる。

車は街には入らずに、脇の坂道を登って行く。

高速道路の入り口みたい坂を登り、街の上空にカーブを描いて走る道路。

その先は、巨大な高層ビル群。

ここは、どこなんだろう・・・。日本、だよな。
見たことのない風景に少し不安になる。

知らない風景2

車は立体駐車場のような車ごと入るエレベーターに乗って上がって行く。

エレベーターが停まると、前方の壁が開きそのまま車がス前にライドする。

車の周りには武装した人たちが取り囲んでいる。

え．．．。

みんなお揃いの制服に銃を構えてる。

銃．．．。

私は息を飲んだ。

本物？

「大丈夫だから。ちょっと降りるの待ってて。」

英人が振り返って私に言う。

二人が先に降りて、車を取り囲んでいた一人と話をしている。

英人が後部座席のドアを開く。

「降りて。」

私は言われるまま降りる。

依然銃口は私たちに、いや私に向けられている。

恐くて無意識に英人の腕に掴まる。

「大丈夫だよ。」

そう言って英人は私の手に自分の手を重ねてくれる。

「東吾、俺は美鈴といふから、さきに話しつけてこいよ。」

「そうだな。」

東吾くんが答える。

「若松、口を慎め。」

さっき二人と話していた人が、きつい口調で英人を嗜める。

「そうでした。すみません。お願いします。」

英人は少しむっとしたようだったが、言いなおしていた。

東吾くんは黙って頷くと、部屋を出て行った。

しばらくすると私たちは別の部屋に異動させられた。

ちょっと近未来的なリビング。

英人と二人ソファに座って待つ。

英人は何も言わない。

ここはどこなんだろう。

私が口を開こうとしたとき、ドアが開いて誰か入ってきた。

綺麗な女の人が私たちのそばへきて、テーブルに飲み物を出してくれる。

大人の女の人。

「すみません、叶^{カナエ}慧さん。」

英人が言う。

「またなにかやらかしたんですって?」

その人がにこやかに答える。

「もう、聞いたんですか。さすが、早いですね。」

英人はいつになくしおらしい。

飲み物をテーブルに置く仕草も立ち上がる所作も、すごく、綺麗。私は見惚れてしまった。

ぼーっと見惚れていると、その人が私の方を見て言った。

「はじめまして。」

あつ、私は自分が見とれていたことに気がついて、恥ずかしくなる。

「すみません・・・私、見惚れてしまって・・・あんまり綺麗で。」

それを見た女の人はクスクスっと楽しそうに笑った。

花が咲いたような笑顔。

「ありがとうございます。素直に受け取っておくわ。私は叶慧といいます。」

「はじめまして。私、美鈴です。」

叶慧さんは頷くと私の向かいのソファに座る。

「疲れたでしょう。飲み物どうぞ。」
やさしい口調。

いいな、こんな女性になれたらな。

私は状況を忘れて、そんなことを思っていた。

数人が部屋に入って来る。
東吾くんがいる。

「彼女が連れだ。俺が見てるから、先に英人の尋問を終わらせろ。」
東吾くんが後ろの男の人に言う。

「まさか、殿下が。いけません。別の者を。」

「だめだ。東吾にいて貰う。」
英人が言いながた立ち上がる。

「若松っ。」

東吾くんの後ろの男の人が怒ったように英人に怒鳴る。

「いいんだ。英人は、臣民じゃない。状況的にも呼び捨てじゃなきゃいろいろ面倒くさい。」

東吾くんが二人の間に割って入る。

「しかし・・・」

男の人がさらに何か言おうとするのを、東吾くんは手の平をその人に向けてもういいという仕草をする。

「申し訳ありません。しかし、その少女と殿下を二人にするわけには参りません。」

男の人は引き下がった。

「でも、俺か英人がいないと心細いよね、美鈴ちゃん。」
東吾くんが私の方にむかっていう。

「えっと、出来れば・・・。」
私はどう答えようか迷う。

「私がいるからいいでしょう？ 東吾と一緒に私もここにいます。」
叶慧さんが言う。

「叶慧。いたのか・・・。」
東吾くんが言う。

「失礼ね。東吾。」
叶慧さんは、不愉快そうな顔をする。

「問題ないな。」
東吾くんが後ろの人に向かって言う。
後ろの男の人は渋々と言った感じに頷いた。

「では、若松は連れて行きます。」
英人の両脇を二人の男の人が固めて連れて行く。

「頑張れよ。英人。」
東吾くんが少し気の毒そうな顔で言う。
英人は何も言わない。

東吾くんと話していた男の人が“では、失礼します”と部屋をでようとしたとき、東吾くんがその背中に言った。

「英人は俺の個人的な契約者だ。本来おまえたちにどうこう言われる覚えはないんだ。扱いはわかっているな。」

「承知しております。」

男の人は苦い顔をしながらも深々と頭を下げて出て言った。

東吾くんは私の隣に座る。

「そうやって特別扱いするから、皆気に入らないのよ。」
叶慧さんが言う。

「特別なんだからしょうがない。」
東吾くんは前にあった英人の分の飲み物を飲みながら応える。

「そんなことを言える立場ではないでしょう。あなたも英人ももう少し大人になって慎むことを覚えなさい。」
叶慧さんの口調は私に話すときと違って厳しい。

東吾くんは何も答えない。

「腹が減ったな。美鈴ちゃん後でごはん食べような。それと、家に連絡を・・・悪いんだけど、たぶん今日は家には帰れない。」

「え・・・。」

「外泊とかまずい？」

どうしよう。なんか、まずいことになってるのかな。

「ううん。連絡入れれば一日くらいは大丈夫だけど・・・。」

「そっか、じゃあ後で電話しよう。ここは携帯つながらないけど、繋がるところがあるから。」

「東吾くん、英人は大丈夫なの？」
あの連れて行かれ方は、なんだか。

「ん？うん、たぶん。無茶はできないように言っただけだ。」「東吾くんの表情は硬い。」

しばらく東吾くんが黙って何か考えていたけれど、思い立ったように立ち上がった。

「東吾、座りなさい。」

叶慧さんが静かにそれを制する。

そう言われて一旦、座ったけれど東吾くんはじっとしていられないようにで部屋の中をうろうろしている。

それからずっと無言のまま時間が過ぎる。

「殿下。陛下がお呼びです。」

人がきて東吾くんに言う。

東吾くんは頷く。

殿下ってやっぱり東吾くんなんだ。

「美鈴ちゃん、ごめん、ちょっと待ってて。叶慧、頼む。」

私も叶慧さんも頷く。

東吾くんは部屋を出ていった。

東吾くんが部屋を出て行くと、少し空気が軽くなった。

「美鈴さん、失礼かもしれないけれど、あなたと二人とはどういう関係なの？」

どういう関係って、どういう関係でもないけど……。

「え……あ、東吾くんとも英人とも専門学校のクラスメイトです。」

「親しいの？」

「親しいか？どうなんだろう。」

「私たちの関係って……人に言うなら、クラスメイトでしかない。」

「いえ、英人とは学校ではよく一緒にはいますけど、東吾くんは実はあまりちゃんと話したこともなくて……すみません。」

「いえ、謝ることはないのよ。聞いてみただけだから。英人と一緒にいるのに、東吾とは話したことがないの？二人は一緒にはいないの？」

「はい、英人は……、二人が学校で一緒にいるところはみたことがなくて。」

「英人は学校にあまり来てなくてと言いつつそうになったけれど、なんとなく言わない方がいいような気がしてそれはやめておいた。」

「そうなのね。」

「あの、ここは、どこなんですか。」

「私はこの際思いきって聞いてみた。」

「叶慧さんは少し困った顔をした。」

「そうよね。なんて応えるべきなのかしら。東吾か英人に説明してもらおうね。勝手なことを言うとは叱られそうだから。」

「失礼します。」

誰かが入ってきた。

「どうしました？」

叶慧さんが答える。

入ってきたのは若い男の子。私よりも若く見える。

「英人様の尋問が終わりました。」

「そうですか。ここへ呼んで貰える？」

「それが、今医務室へ運びました。」

医務室・・・？

叶慧さんは険しい顔でため息を吐く。

「あの、医務室って。」

私は叶慧さんの表情を見て不安になる。

「行きましょう。美鈴さん。」

叶慧さんは伝えに来た男の子に、東吾くんが戻ったら伝えるように言って私の手を取ると、ポケットから出した腕輪を私の手首に嵌める。

「ごめんなさいね。一応、枷をつけさせてもらうわ。あなたを守る意味もあるから。」

私はなんのことだかよく解らなかったけれど、とにかく頷いた。

叶慧さんについて、部屋を出て幾つものドアを抜けてエレベータを乗り継いで、病棟らしいところに着いた。

叶慧さんが白衣の人と話をしてる。

「こっちよ。」

私の手を取って歩き出す。

美鈴さんの手は冷たい。

病室のドアは開いていた。

病室に入った私は思わず声を上げて、口を手で覆った。

英人は頭に包帯を巻かれて、顔は腫れあがっていた。

唇も切れて腫れてる。

首も包帯が巻いてある。

体中に包帯が巻かれている。

「うそ・・・英人、なんで・・・。」

私は恐くなって足が震えた。

「英人」

叶慧さんは気丈に英人の傍へ寄る。英人の額に手を宛てて、顔を寄せる。

英人が薄っすらと目を開けて僅かに唇がうごく。

「叶慧さん・・・。」

「よかった、意識がある。もう大丈夫よ、すぐに治してあげるわ。」
叶慧さんがやさしく英人に言う。

英人の唇が動く。

「美鈴は？」

叶慧さんが私の方を見る。

私はゆっくりと英人の傍に寄る。叶慧さんが私と入れ替わって私の背をそっと押してくれる。

「英人。」

私は傷だらけの英人が痛々しくて、涙が溢れて来る。

「泣く、なって……。」

英人が手を上げようとする。包帯だらけの腕。

私はその手を取る。

私の所為？ 私があんなところに居たから……。涙が溢れ出す。

「ごめん……英人。私が、あんなところに居たから……。」

「違う。悪いのは……俺……だから、巻き……込んで……ごめん。」

少しずつ唇を動かして英人が私に言う。

どうして、私が悪いのに。

誰かが走って来る足音がしたかと思うと、東吾くんが部屋に飛び込んできた。

「英人っ……なっ。」

東吾くんは啞然として眺めていたけれど、やがてその表情が歪む。

「あいつら・・・全員首にしてやる。」

「いけません。」

叶慧さんが言う。

「俺を馬鹿にしてるとしか思えない。」

「だったら？どうするの？自分に刃向かう者はすべて切り捨てていくつもり？あなたはもっと謙虚になって周りを見なさい。あなたがもっと上手く立ち回れば英人はこんな目には合わなかったはずよ。これはあなたが招いたいのよ。大切な者守るために折れることを学びなさい。」

叶慧さんが東吾くんに向かって厳しい口調で言う。

病室の中の空気が張り詰める。

二人の間

あれから一カ月、東吾くんも英人も以前通り。私たち三人の関係も以前通り。あの一件についてはあれ以来触れることもない。すでに私の中では現実味を失いつつある。

英人は相変わらず学校に來たり來なかつたりで、ここ四日間姿を見ていない。さすがに三日以上連続で休むことはなかつたので、少し心配で昨日連絡してみたけれど返事はない。

今日で四日目。私は英人の席に目をやる。

何かあったのかな。

東吾くんは出席してる。私は東吾くんを見る。クラスメイトと楽しそうに何か話している。

私は東吾くんに英人の事を聞きたいのだけれど、東吾くんはいつも誰かと一緒にいるからなかなかタイミングがつかめない。

今日は午前中で授業が終わってしまうので、帰りまでに東吾くんを捕まえなければ英人の事は訊けない。もうすぐ三限目が始まるころなので、もうあまりチャンスがない。次の休み時間には訊こう。

三限目が終わって、私は意を決して東吾くんのところへ行くべく席を立ち上がって振り返った。すると、目の前に東吾くんが立っていた。

「俺に用事？」

「え・・・」

私は驚いて声を上げてしまった。近くにいたクラスメイト達がこっちをみる。

「俺に用事かかって思っ。今からジュース買いに行くけど、付いて来る？」

東吾くんは私の反応が面白かったのか、笑いながらそう言って教室の出口へ歩いて行った。

「うん、行く。」

私はみんなの注目が恥ずかしくて、急いで東吾くんの後を追って教室を出た。

「で、どうしたの？俺の事ばかりみて。」

ああ、朝から様子窺ってたのばれだっただ。

「ああ、あの、英人知らない？」

「英人？なんで？」

東吾くんは不思議そうに言う。知らないのかな。

「ずっと休んで、もう4日目だから。東吾くんなんか知ってるかって。連絡してみたんだけど返事なくて。」

東吾くんは自販機の前でうーんと唸っている。どれを買うか迷っているのか、英人のことで考えているのか分からないけれど。

「それで、俺に訊くかどうか迷ってたってわけね。」

「うん、まあ、そんなところ。」

「そっか。」

東吾くんは自販機のボタンを押して、出て来たコーヒーを取り出すとその場で開けて飲み始めた。

「何か知らない？」

私はコーヒーを飲みながら廊下の壁にもたれている東吾くんにもう一度訪ねた。

「知ってるよ。」

「えっ。」

「でも、ただでは教えられないな。」東吾くんはふふんと笑った。

「ええ？何それ。」

「今日の放課後俺に付き合っ。そしたら教えてあげてもいいよ。」

「放課後？」

「うん。予定ある？」

「ないけど。」

「じゃあ、決まりね。」

えっと、そこまでしないと教えられないようなことなのかな。

放課後、私は東吾くんと一緒に学校を出た。

「ちよっとき、買い物に付き合ってほしいんだ。」

「買い物？」

「うん。それと、料理。」

「料理？」

私は首を捻った。授業の復習かなにかかな。それか試作とか？

「試作するの？」

「え？ああ、ちがう、ちがう。家庭料理。」

「家庭料理？」

全然意図が掴めない。

「家庭料理教えてよ。俺はさ、学校で習ったことは出来るけど普通に家で食べるようなのはできないんだよ。だから、そういうの作り方教えてよ。」

そっか。そういうことね、そうだね。東吾くん王子様だもんね。

「なにがいいの？」

「なんでもいいけど、元気になるやつ。」

「元気って？」

「体力落ちてる時に食べるといい感じなやつ。」

つまり精がつくってやつか。疲れてんのかな、東吾くん。

「ああ、あと玉子粥。」

「たまご粥？」

「そう、それ食べたい。」

「ああ、了解。じゃあ、他は買い物しながら考えるよ。」

つまり、私に料理をしろってことね。別に難題って訳じゃないしな

んか困ってるみたいだから全然構わないけど。

東吾くんの家へ帰る途中のスーパーで買い物をして歩く。

「そのこのアパート、英人のアパートだよ。あの赤っぽい屋根の。」

隣を歩いていた東吾くんが私たちのいる通りから見える建物を指差して言った。少し古い感じのアパートが見える。

「え、そうなの？」

「うん。今はいないけどね。」

「いないの？」

「うん。外泊中。」

「そうだ。英人のこと教えてくれないの？」

「ん？教えるよ。美鈴ちゃんがちゃんとご飯作ってくれたらね。」

「作ってくれたらって、教えるんじゃないかったっけ？」

「え、そうだったけ。」

東吾くんは楽しそうに笑う。

「そうだよ。手伝ってよ。材料こんなにあるし、だいたい多すぎ。」

「まあまあ、俺一杯食うから平気平気。」

東吾くんはまた歩き出した。

そこから2、3分で東吾くんが立ち止まった。

「ここ、俺のアパート。」

私は目の前の建物を見る。さすが王子様、英人のアパートとは違っている。いいお住まい。新しいし、学生の一人暮らし用では絶対ない。普通に家族とかで住んでそうなアパート。

駐車場には、この前乗せて貰った車が停まっている。

東吾くんはドアを開けて、私を先に通してくれる。

「どうぞ。」

「お邪魔します。」

やっぱり中也も新しくてきれい。

玄関からまっすぐに廊下が続いていて両側にいくつかと正面にひと

つドアがある。

「まっすぐ行ってー」

後ろの東吾くんに言われるままにまっすぐ進んで正面のドアに入る。ドアを入ると同時に声がした。

「おっせーよっ。てか、食いもん置いとけよ。」

私は声がした方をみると、テレビの前のソファに仰向けに寝そべっている英人がいた。

「お、やつと目が覚めたか。」

「なんで美鈴がいるんだよ。」

英人は少し驚いた顔をしていたけれど、声の調子はそうでもなく少し不満げだった。

「え、ああ、料理作ってもらおうと思って。おまえがそろそろ目覚ますところだし、でも俺病人に食わすもんなんか作った事ねえし。」

「病人？」

私は思わず東吾くんを見る。

「うん、病人って言うか、とりあえず体力付くもん食わしときゃ大丈夫。キッチン好きに使って。」

「あ、うん。」

私はすぐ横にあるキッチンに入る。東吾くんはスーパーの袋ををキッチンの台の上に置くと英人の方に行った。

「で、どうだ。調子は？」

東吾くんが英人の額に手を宛てる。熱を見ているみたい。

「もう平気だ。」

「でも、もう一日停まってけよ。」

「いや、帰る。」

「まだだめだ。動けるからって油断してるとぶり返すぞ。5日は絶対安静だって医者が言ってたし、目離すなって言われてる。」

「明日も家で寝てりゃいいんだろ。平気だ。」

「ばか。それでも結局俺が様子見にいかなきゃなんねえんだから、

めんどくせえんだよ。」

そういわれて英人は黙ったみたい。

私はそんな二人のやり取りを聞きながら、料理の準備を始めた。二人分にしては多いと思った食材の量に納得。

対面式になっているキッチンの前にはテーブルが置いてある。ふと見るとそのテーブルの上に、メモ書きがある。

“目が覚めても、勝手に帰るな。俺が帰ってくるまでじっとしてろ。”

東吾くんから英人に宛てたものなんだろうな。英人、風邪でもひいてたのかな。

「ま、目が覚めて安心した。動けるんなら、風呂入ってこいよ。おまえの着替え部屋に置いてあっただろ？タオルとか適当に使っていいから。その間に飯作っとく。」

東吾くんはほっとしたようにそういうと、英人の肩をぽんっと叩いてこっちへ戻ってきた。

「おまえ、俺のアパートに取りに行ったわけ？」

英人は寝そべっていた身体を起こして、東吾くんの背中に言った。

「ああ、洗濯物とか干しっぱだったらまずいなーっと思って。」

東吾くんはそう言いながら、私の隣に並んだ。

「美鈴ちゃん、英人の部屋めっちゃ汚ねーの。」

「そうなの？英人らしいけど。」

私は冗談めかして言ってみた。

「うるせえよ。」

英人は立ち上がると、面倒くさそうにそう言って部屋を出て行った。東吾くんは、なにしたらいい？と言いながら手伝い始めた。作ったことがないと言いつつやっぱり手際はいい。

私はリクエストのたまご粥に卵を溶き入れながら、東吾くんなりに病気の英人を気づかっていたたまご粥って言ったんだろうとか学校で

病人に食べさすなら何がいいか誰かに聞いたんだろうなと考えていた。

「なに、なんか面白かった？」

東吾くんが面白いものを見る目でこっちを見ながら言った。私はどうやら顔がにやけていたみたい。指摘されて戸惑う。

「え・・・、あ、うん。東吾くんってやさしいんだって、」

その時ガタンッと大きな音がした。

東吾くんはこっちを見ていた頭を反対側に向けた。

「倒れたかな。見てくるよ。」

東吾くんは少し慌てた様子で、キッチンを出て行った。

少しして東吾くんに支えられながら英人が戻ってきた。そのままソファに寝かされている。

「大丈夫なの？」

「大丈夫。急に動いたからだと思う。」

英人は応えず、東吾くんが応えて英人の額に手を宛てている。額に宛てた東吾くんの手が僅かに発光する。

あ・・・。治療。

私は前に叶慧さんがそうしていたのを思い出した。やっぱりあれは現実だったんだ。

東吾くんの英人を見る目はやさしい。前は二人の中は悪いんだと思っていただけれど、例の一件イメージが変わった。傍で見ていると東吾くんが英人を大事に思っていることがよく解る。英人の方はなんだか反発している感があるけれど、でも今日はなんだか素直みたい。

「そのまま横になってろ。」

そういつて東吾くんはキッチンへ戻ってきた。

「英人、どうしたの？風邪？」

「ううん。毒にやられて。」

「毒?!なにそれっ。大丈夫なのっ。」

「大丈夫だよ。ちゃんと治療はしてるから、問題ないよ。」

「それで東吾くんがずっと看てたの？」

「うん、こっちじゃこういう時はお互いが頼りだからね。連れて帰ってもよかったんだけど、こっちでなんとかなりそうだったから。俺が看てた。」

「大変だったね。言ってくれば手伝いに來たのに。」

「ありがと。今日来てくれて助かったよ。」

「着替えも取りに行つてあげたり、東吾くん、ほんとやさしいね。」

「ん? いや、英人に無理させてんのは俺だから。でも、こういうとき別々に住んでると不便なのは確かだな。俺としては一緒に住んでくれるとありがたいんだけどな、と思つてこの隙に英人の荷物を全部運び込んでやろうかと思つたんだが、意外に荷物が多くて断念した。」

“俺としては一緒に住んでくれると”から声が大きくなった。きつと英人に聞かせたかつたんだろう。英人はちらつとこっちに頭を向けたんだけど、また目を閉じた。

出來た料理を盛り付けて、食卓の準備をする。一人暮らしとは思えないほど食器も揃つてゐる。

東吾くんが英人に起きれるか、と声を掛けると英人は起き上がつてテーブルに着いた。

「美鈴の手料理か、うまそー。」英人は嬉しそうに言ってくれる。

「美鈴ちゃんと“俺”のな。」すかさず東吾くんが言う。

「そうだよ。東吾くんに感謝しなきゃだよ、英人。」

私がそういうと、英人は私にやさしい笑顔をくれた。

「わかったよ。美鈴がそう言うなら仕方ない。ご迷惑お掛けしました。感謝してますよ。」

「なんだよ。美鈴ちゃんには素直だよな。」

「とーぜん。いただきます。」

「このまま一緒に暮らすか。」

「断る。」

英人は即答、

「つれねえの。ま、別にいいけどな。」

東吾くんは仕方ないと言った風に英人を見た。

翌週には英人も学校に登校してきた。

「美鈴、飯買いに行こう。」

英人が可愛らしく私を呼ぶ。

「なに、それ」

英人の甘えた声がおかしくて私は笑う。

「ん？ かわいいーだろ？」

「かわいいけど、笑える。」

「可愛さ100%だ。」

「なに？ どういうノリ？」

「わかんね。元気になったから、テンション上がった。学校っていいなあ。」

「うそつけ。こないクセに。」

「来ただろーちゃんとー。」

「まあ、今日はねー。」

二人で学校を出て近くのコンビニへ行く。

英人はおにぎり三個とお茶。

コンビニを出ると目の前を勢いよく人が走って行く。

「英人っ、行くぞっ。」

「え・・・？」

英人はいきなり名前を呼ばれてぽかんとしている。
通りすがりに英人の名前を呼んで走って行ったのは、東吾くん。既に横断歩道を渡って向かいの通りに着こうとしている。

「あれ、東吾くんだよ。いいの？」

私は隣でぼーっとしている英人を見る。

「あ、ああ。行くわ。美鈴これ、頼む。」

英人はさっき買ったばかりのお昼ご飯の入ったビニール袋を私に渡す。

「うん。大丈夫？」

「ん、大丈夫。東吾だったよな。」

「うん、東吾くんだったと思うよ。」

「行ってくる。」

英人はそういうと、東吾くんの後を追って走って行った。

私は学校に一人戻ってご飯を食べながら、教室を見回す。
やっぱり、東吾くんもいない。

「ねえ、東吾くんは？」

私は近くにいたクラスメイトに訊いてみる。

「ん？なんか、急用とかで帰るってー。なんかあったのかな？」

「そうなんだ。珍しいね、東吾くん。」

「だねー。で、あんたんとこの英人くんは？」

「え・・・わたしのとこのって・・・」

「ほんとに付き合っていないの？」

「ないよ。仲良しなだけ。」

「ふうん。」

友達はずまらなさそうに私を見る。

そりゃ、付き合えたらいいんだろうけど。

私と英人の関係は微妙で、英人は私の事どう思ってるんだろう。

私は机に掛けてある英人から預かったビニール袋を眺める。

帰ってくるのかな。これ、どうしたらいいんだろう。

このまま置いてくわけにもいかないし・・・、かといって連絡して邪魔になっても困るしな。

学校が終わっても英人は戻ってこなかった。もちろん東吾くんも。私は英人のお昼ご飯になり損ねたおにぎりとお茶に入ったビニール袋をぶら下げて学校を出た。

この前、東吾くんの家に行った時、英人の部屋教えて貰えばよかった。そしたら届けに行けたのに。

私は手に持ったビニール袋を持ち上げる。

どうしよう。

今日はバイトだから、私の夜ごはんにしちゃうかな。

英人にはメールしとこう。

案の定、英人からの返信はなし。

そして、次の日も東吾くんと英人は休み。

どうしたんだろ。東吾くんまで休みなんて、珍しい。

東吾くんはともかく、英人は真剣に出席日数が足りないと思うんだけど。

返事がないのはいつものことと自分に言い聞かせて、英人に出席やばいよとメールを送る。

学校が終わると、英人からメールが届いていた。実習だったから気

が付かなかった。

“東吾の家にきてほしい。”

どうしたんだろう。また何かあったのかもしれない。

私は英人に電話を掛ける。

すぐに電話の向こうから、もしもと英人の声がした。

「英人？」

「うん。美鈴？」

「うん、どうしたの？」

「なにが？」

「なにがって、東吾くんなんかあったの？」

「東吾？ いや、なんも。」

「え？」

「なんで？」

「なんでって、家にきてって。」

「うん、また一緒に飯食おう。」

「え。」

「東吾と二人はやだけど、美鈴も一緒ならいいなーって。」

「なにそれ。」

私は胸をなでおろした。

なぜかすごく心配してしまった。

「美鈴来たら、一緒に買い物行くからはやくおいで。」

「うん、わかった。じゃあ行くね。」

「おお。」

なんだ、よかった。

私はもう一度心の中でそう呟いた。

英人が傷ついてベットに寝ていた姿、今でもはっきり覚えてる。

身体中包帯だらけで、顔が腫れあがってて、あんな姿もうみたくな
い。

にしても英人、東吾くんと一緒にいるんだ。
何気に仲良くなってるのかな、あの二人。

私が東吾くんの部屋に着くと英人が飛び出してきた。

「みずずーっ。」

相変わらず、犬っぽくてかわいいヤツ。

「おじゃまします。」

「いらっしやい、美鈴ちゃん。」

奥から東吾くんが微笑む。

東吾くんの笑顔も和むわ。

「英人が呼ぼうってきかなくって、ごめんね。まあ、座って。」

東吾くんはコーヒーを淹れて手渡してくれる。

「ううん。ちょっと心配してたから、二人とも元気そうでよかった。」

「心配？」

「うん、走って行ったつきり学校も休むし。またなんかあったのか
なって。」

「ああ、そっか。ちょっと疲れて、二人とも動けなかったから。」

東吾くんはクスクスと笑う。すごく楽しそう。

「英人がドジでさっ、相変わらず。」

「人のこといえねえだろうが、今回は。」

英人が難しい顔で反論する。

「まあ、そうだな。今回は俺もドジった。」

東吾くんは自分でそう言って笑い飛ばす。爽やかな笑顔。
ちょっとドキっとしちゃうかも。

私は二人を眺める、怪我はしてないみたいだし元気そう。よかった。

三人で買い物に出る。

「で、何作る？」

私が切り出す。

「うーん、何食べたい？」

東吾くんが私に聞く。

えっと、私は考える。

「俺、肉食いたい。」

英人が言う。

「おまえに聞いてない。」

東吾くんが透かさず応える。

「おまえに言ってるじゃない。」

さらに英人が言い返す。

もう、結局仲悪いの？

「あーっと、じゃあ豚肉のショウガ焼き。」

「おお、いいね。」

英人がうれしそうに言う。

「それとー、サラダとスープとごはん。」

私が続ける。

「うんうん、でもせっかく三人いるからーワンタン包んでスープに入れよう。」

東吾くんが提案。

「いいねー」

私は賛成。

「なんでもいいから、食わせろー。」

英人は適當。

「ばか、おまえも手伝うの。」

東吾くんはお兄ちゃんだなー。

「えっと、キャベツと玉ねぎとー」

東吾くんはバラ売りの玉ねぎを手にとって品定め。

「英人、キャベツ取って」

ちょうどキャベツの前にいた英人に東吾くんが言う。

「んー。」

英人は目の前にあったキャベツを取ると英人君に差し出す。

「えー、おまえはちよつとは選ぶとかしろよ。ちゃんと葉の巻きがしつかりしたの選ぶんだよ。」

「うっせえな、じゃあ、自分で選べよ。」

東吾くんはあつとため息を吐くと、英人の手からキャベツを取って棚に戻し、自分で選び直す。

「おまえは料理人にはなれないな。」

「ならねえつつうの。」

「そうかよ。ほれ、これもってみ。重いだろ。」

東吾くんが英人にキャベツを渡す。

英人はキャベツを受け取って一瞬、じつと東吾くんを見ていた。

「ん？」

何も言わない英人を東吾くんが覗き込む。

「いや、わかんね。肉見てくる。」

英人はキャベツを私の押しているカートの籠に入れると、肉売り場の方に行ってしまった。

なんだろう。なにか気に障ったのかな。

「なんだあいつ？」

東吾くんは英人の後ろ姿にそう呟いた。

私と東吾くんは野菜を揃えて、肉売り場の方へいくといくつかお肉のパックを持って英人が戻ってきた。

「これでいい？」

英人がもっていたお肉のパックを籠に入れる。

「おー、オツケー、じゃああとは調味料とかかな。たぶん足りないのあるから。」

買い物を終えて、三人で調理に掛る。やっぱり東吾くんは手際がいい。英人も思ったよりは手際がいいかも。

さすがに三人でキッチンに立つと狭いけれど、でも楽しい。そして立ち位置はいつも私が真ん中。仲裁役的な位置。料理はばっちり美味しくできた。

帰りは英人と一緒に東吾くんの家を出る。

「じゃあ、またね。お邪魔しました。」

私は東吾くんに手を振ってドアを閉める。

私と一緒に帰る英人は無言。

「英人明日は学校きなよ。出席やばいんだから。」

「あー、うん。そうだな。」

「そうだなって、卒業できなくてもいいの？」

「いや、よくない。」

「でしょ。」

「美鈴、サンキュな。」

「ん？なにが？」

「今日来てくれて。」

「なんで？私も楽しかったけど。なんかあったの？」

「いや、なんもないんだけど。なんとなく。」

「なんとなく？」

なんだろう。なんとなく、なに？

「おれ、やっぱさ、東吾、苦手なんだ。」

「苦手？なの？仲よさそうに見えたけど。」

「いや、二人とかつらい。」

なんだ、それで呼んだのか・・・。

「そっか。でもさ、一緒にいなきゃいけないんでしょ？」

「うん、そう。仕事っていうか、務めだから。」

「そっか。大変だね。」

「あ、俺ここで、あっちだから。」

いつの間にか英人のアパートが見えるところまで来ていた。

「英人の部屋って何号室？」

「ん？303だけど。」

「そっか。おとついのおにぎりとお茶届けようかとおもったんだけど、部屋わかんなくって。」

「ああ、いいよ。そんなの。今度返してくれれば。」

英人はそう言っただけでイタズラっこみたいに笑った。

「なにそれー、返すのー??」

「食ったんだから、返すの当然。」

英人は嬉しそうに笑う。

「まあ、うそだけど。ありがとな。駅まで道わかる？」

「大丈夫。ありがと。」

英人と別れて一人駅まで歩く。

英人って東吾くんのこと苦手なんだ。東吾くんの方は全然英人のこと好きっぽいけど。それに、英人もそんなに苦手とかには見えないけどな。

そういえば叶慧さんが誤解があるとか言ってたっけ。なにかあるんだろうな。

訊けないけど。でも、私のこと頼ってくれるのはうれしいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9601u/>

セカンド

2012年1月13日18時55分発行